魚介類の生息状況からみた三枚洲周辺海域の特徴

図 1　魚介類調査地点

前報では水質・底質調査からみた三枚洲周辺海域の特徴についてお知らせしましたが、本報では三枚洲周辺の 6 地点で平成 25 年度から行ってきた魚介類調査の結果からみたこの海域の特徴についてお知らせします。なお、6 つの調査地点は前報と同様に砂州域（St. 1、2、5）と沖合域（St. 3、4、6）に大別し、それぞれの海域の特徴を紹介します（図 1）。

はじめに、アナゴ筌調査の結果（図 2）を見てみますと、平成 25 年の調査開始からこれまでに 306 尾のマアナゴが採捕されていますが、沖合域での採捕が全体の 76%を占めています。また毎年、夏期に沖合域の底層が貧酸素になると、貧酸素にならない砂州域でもマアナゴは採捕されなくなります。このことから三枚洲周辺のマアナゴは主に深場の沖合域を棲み場とし、浅い砂洲域へは夜間、索餌のため日周回遊するように、沖合域と砂州域をうまく使い分けていると思われます。ただ、この 2，3 年採捕数が減少しており、今後の動向が心配されます。

延縄調査と刺網調査（図 3、4）では、両調査あわせて魚類が砂洲域では 29 種 2,224 個体、沖合域では 24 種 259 個体採捕されており、砂州域の方の生物が豊かに思われます。しかし、この結果はコノシロが砂州域で大量に漁獲されるケースがあるためで、生物の群衆の豊かさを示す多様度指数は沖合域、砂州域とも同程度でした。また、両調査とも夏期に沖合域で底層が貧酸素になる時にも採捕数が極端に減るようなことはなく、延縄、刺網調査で漁獲対象とする表・中層性の遊泳魚類にとっては、砂州域、沖合域とも同じような環境にあるものと思われます。

桁網調査（図 5）では、砂洲域で魚類が 10 種 61 個体、甲殻類が 12 種 192 個体、貝類が 26 種 44,623 個体採捕されたのに対し、沖合域ではそれぞれ 5 種 5 個体、4 種 14 個体、15 種 3,309 個体であり、砂洲域のほうが生物量、多様度指数とも高く、また、一年を通して魚類、甲殻類、貝類とも採捕されています。海底を棲み場とするマゴチやハゼ類等の底生性魚類や甲殻類、貝類にとって、砂州域の環境は一年を通して良好で、湾奥に残された貴重な干潟が保全されている状況がこの調査結果からも確認できます。

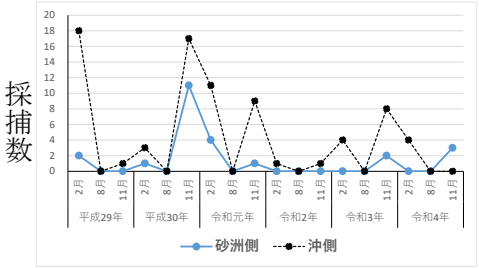

図 2　アナゴ筌

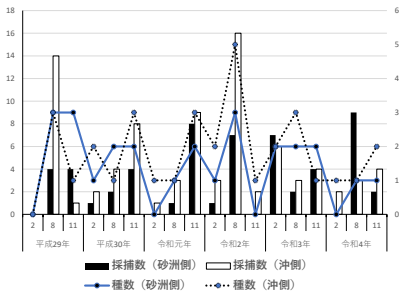

図 3　延縄

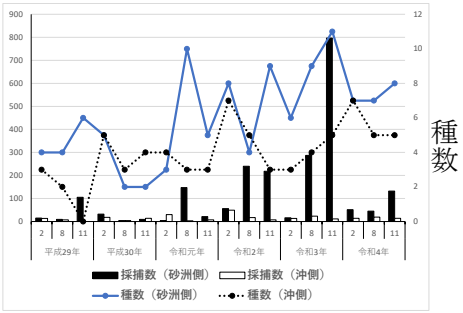

図 4　刺網

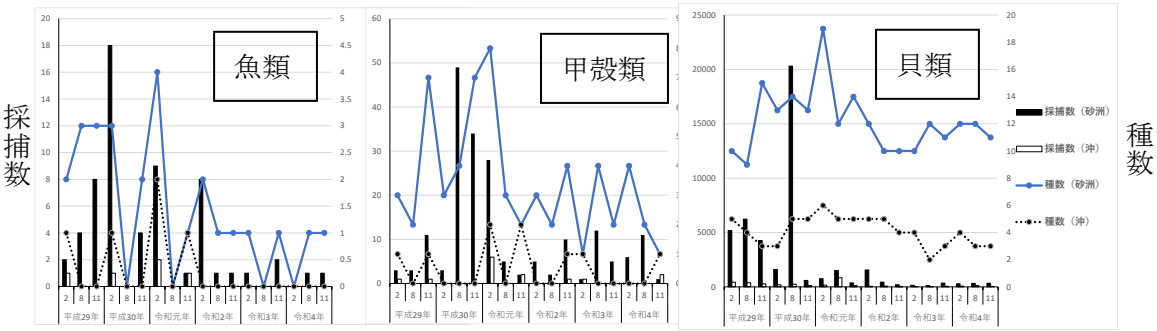

図 5　噴流式貝桁網